

JUNE 2022

VOL.18

JPC *News*



コロナ禍を経た教会のあり方

Japan Pentecostal Council

NOBUYOSHI NAGAI

日本ペンテコステ協議会副議長
永井 信義



巻頭言

神の臨在とともに行く

もしあなたのご臨在がともに行かないのなら、私たちをここから導き上らないください。(出エジプト記 33 章 15 節)

コロナ禍のみならずウクライナ情勢など、なかなか出口感がない、出口が見えないと多くの人が考えているのではないかと思います。しかし、出口をどのように進んでいくのかに関して、私たちは今、神の導きをどうしようもなく必要としています。

シナイ山で十戒がモーセに与えられている中、イスラエルの民は偶像礼拝の罪を犯し、神のさばきを受けます。しかし、神はモーセに再度、神の約束の地へ行けと命じられます(出エジプト記 33 章 1 節)。と同時に、「しかし、わたしは、あなたがたのただ中であって上らない」(同 3 節)とも告げられました。

それに対してモーセは神の導きを求めます。「今、もしも私がみこころにかなっているのでしたら、どうかあなたの道を教えてください。そうすれば、私があなたを知ることがで

き、みこころになかうようになれます」(同 13 節)と求め、それに対して主は「わたしの臨在がともに行き、あなたを休ませる」(同 14 節)と答えられます。神が「人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせて」語られる(同 11 節)モーセは、さらに冒頭の「もしあなたのご臨在がともに行かないのなら、私たちをここから導き上らないでください」と願い求めました。

難しい、先が見えない状況の中で、私たちキリスト者が求めるべきことをまさにモーセは神に願いました。神の臨在のあるところ、神が行かれるところに行くということです。

パウロは神の臨在とともに行く、歩むことを次のように表現し、勧めています。

「私たちは、御霊によって生きているのなら、御霊によって進もうではありませんか」
(ガラテヤ人への手紙 5 章 25 節)

「このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストにあって歩みなさい」(コロサイ人への手紙 2 章 6 節)

「私たちは見えるものによらず、信仰によって歩んでいます」(コリント人への手紙第二 5 章 7 節)

多かれ少なかれキリスト者はどの時代も経験したのではないかと考えられますが、まわりを見て、情報を集めるだけでは、先を見通すことが難しいときに私たちも置かれています。そんなときだからこそ、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」(マタイの福音書 28 章 20 節)と言われる主イエスが行かれるところ、主イエスによって遣わされるところに私たちは出かけていきたい、進んでいきたいと心から願います。

最初のキリスト者たちはこの主イエスの約束に押し出されて、まさに全世界に出て行きました。そして、マルコが書き記したように「主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた」(マルコの福音書 16 章 20 節)のです。



NOBUYOSHI NAGAI

イエス・キリスト福音の群 代表
東北中央教会 牧師

永井 信義

コロナ禍を経た教会のあり方

なかなかコロナ感染の収束が見通せない中ではありますが、「ウィズ・コロナ」という言葉が示すように、今後も感染症のリスクとつきあいながらの歩みとなると考えられます。しかし、私たちがいつも覚えておかなければならないのは、そして、神を信じる者に求められるのは、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」（マタイの福音書 28 章 20 節）と約束された方とともに歩むことに集中することです。

この「ウィズ・ジーザス」であり続けるためには、より一層、働き人たちのとりなし、励まし合いが必要だと思われれます。イエス・キリスト福音の群はその東北、関西、九州に教会が在り、コロナの影響もあって、この 2 年ほど全国から集まることができていません。集まることの大切さを再確認させられていますが、オンラインも含め、各地区や世代別など、よりさまざまな形で集まることを目指していきたくと願っています。

また、私たちの群が掲げ続けているヴィジョンであり、教会の基礎研究、つまり、どの教会も例外なく取り組むことが求められていると考えられる教会開拓、教会増殖は、より一層、その取り組みを強化していきたくと考えています。この教会開拓、教会増殖の働きは、

一教会、また、一教団、グループだけでできるものではありません。地域の教会だけでなく、他の教団、グループ、さらには宣教団体や海外のグループや教会増殖のネットワーク（例えば、教会増殖ビジョンフェスタなど）との協力関係はその働きを加速化していくためにも必須だと受けとめています。

主イエスが「わたしたちは、わたしを遣わされた方のわざを、昼のうちに行わなければなりません。だれも働くことができない夜が来ます」（ヨハネの福音書 9 章 4 節）と教えられているように、「だれも働くことができない夜」が来る前に、私たちが遣わされているところ、そして「近くにある別の町や村」（マルコの福音書 1 章 38 節）で福音宣教のわざに取り組み続けたいと心から願っています。



AKIHIRO MIZUNO

神の家族キリスト教会 代表
クリスチャンライフ 主任牧師

水野 明廣

コロナ禍を経た教会のあり方

コロナ禍のために私たち神の家族の群れの中の教会でも、2 か月以上一緒に集まれなかったという現状があります。

私は 2022 年のために祈る中で、イエス様に愛された弟子のヨハネが思い起こされました。彼は信仰の故にまた彼の影響力を止めたいという勢力のためにパトモスの島に強制的に行かされ孤立させられました。その状況の中でヨハネは黙示録 1:10 にあるように主の日を守り、大切にし、主を礼拝していた人でした。主の日に彼が『御霊に感じた』と書かれています。つまり、孤立している中でも、主を仰ぐ習慣、主に頼る本物の信仰を持っていたのです。このヨハネに神は素晴らしい啓示を与え、本当の教会がどうあるべきか、また霊的な戦いと同時に主の再臨の素晴らしい約束が与えられていることも教えられました。私は、今こそ聖霊に触れられ満たされて生きるという現実を私たちはもっと体験しなければいけない、と示されています。

素晴らしいペンテコステ派に属しているクリスチャンと言われながら、実は聖霊の感動、聖霊に包まれるという実体験のないクリスチャンがいるのではないかと危惧する現実があります。事実、この聖霊ご自身だけが私たちの宣教、主の働きを推し進める唯一の力であり拠り所です。私たちは単なる人間的な理性や経験に拠りすぎるのではなく、今こそ聖霊の満たしと聖霊に包まれるという体験、ヨハネが実体験した神が共におられるという素晴らしい体験が私たちに求められていると私は信じています。

マタイ 24:5 以降に、「この世の終わりはどのような状況でしょうか」と弟子たちが尋ねた時、イエス様が言われた事は「惑わす者が大勢、惑わしの声が多くなっていく」でした。まさに多くの人たちが惑わされている現実の中で、悲しい事に、惑わしの霊によってクリスチャンさえも惑わされていると聞いています。そして今問われているのは、私たちが誰かと一緒にいるなら、人によって、人のために、という人に結ばれての信仰ではなく、まず父

なる神、主と直接、聖霊による信仰の確立です。同時に「コロナの問題」ではなく「コロナが私たちにもたらした恵みの時」と見方を変えるために、聖霊の影響力がどうしても必要だという確信を深めています。

私の幼い頃は戦争が終わったばかりで、日本の悲惨な状況を私も少し経験しました。当時私の姉がキリスト教会に行き、教会が人々でいっぱいだったと驚いて帰ってきたのを覚えています。私も連れられて行ったことがあります。終戦後、日本ではその教会だけでなく、至る所で人々が教会に集められました。残念なことに、そのように求めてくる人々の渇きに対して、当時の日本の教会は答えることができなかったことも私は学ばされました。私たちは、動揺している社会の状況、戦争が起きている現実がある時代の中で、本当に今、ヨハネが経験したような神様の実体験、主イエス様の素晴らしさの体験、御霊に触れられる、満たされる、包まれるという感動の体験、また、赦されること、愛されること、神の癒しがあることを、クリスチャン一人一人が主に求め、体験し持たなければならないと私は切に思います。

このコロナ禍の中で先日も私の所に神の家族の群れのある牧師が、「先生、教会に人々が集まって来てくれるが、中々リーダーが育たない。自分で他の人をキリストに導くとか、自分で祈り、人々を神様の御用のために引き上げるようなリーダーがいない。私一人でやっているような気がして。」と相談に来ました。私は「あなたが、特にこの人は！という本当に主に用いられて欲しいと願う人たちを集めて来なさい。」と伝え、最近、その働き人たちの学びの時を持ち始めました。

旧約聖書のマラキ書にあるように、主の再臨が近い時に、主は、「主に仕える者と仕えない者との違いが分かる。」と仰いました。まさに、このようなコロナのおかげで、本物の信仰なのか借り物の信仰なのかも私たちは問われている、と思っています。

また、イエス様がマタイ 9:37 で言われた「収穫は多いが働き人が少ない。」本当にそのように感じています。今まさに収穫の時、働き人が必要な時代です。主の働き人に、聖霊体験と「聖霊様によって」という現実がなければ、決して主の働きは続けられません。そうでなければ私たちは単なるキリスト教という宗教を知ることに終わってしまいます。

私たちに求められるのは、キリストの素晴らしさを自らも体験し、キリストの福音を伝える働き人ではないでしょうか？そのような働き人が整えられるために、今コロナの時期が与えられたと思って、しっかり主にある聖徒たちを働き人として整え、聖霊様の力を人々に付与でき、人々と共有できることを切に願ってやみません。





MARIA TSUJI

サンビ教団

ホーリーバイブルチャーチ 伝道師

辻 マリア

時代の波によって教会も

大阪の田舎の一軒家を改装して、毎週日曜日に隣りの人の肩が当たりそうなくらい密集して礼拝をしていたのが今では懐かしく感じます。

それこそ2年前では考えてもない礼拝の在り方が、今では主流となっている「オンライン礼拝」。

当時、教会に来る事ができない日は礼拝を守ることができない環境だったので、来たくても様々な事情で集うことができない信徒さんのための礼拝体制が充分にできていませんでした。

しかし、コロナ禍の中で勢いよく教会の中で、特に若者が率先してインターネットを使ってオンライン化の流れを掴んでくれた事で、教会に来なくても各家で礼拝に参加することが実現できるようになりました。

不思議なことに、コロナ前に年配者の方々がガラケーからスマホに変えていたこともあり、このオンライン礼拝を実現できたのが感謝なことでした。

また、今まで参加できなかった様々な集会全てにオンラインで参加可能となり、信徒さんたちの参加率がコロナ前よりも増加した事には私も想像していなかったことです。しかし、オンラインにも慣れ始めると何か物足りなさを感じ始めました。

当初は、奉仕者のみが教会に集って各集会をオンラインで行っていましたが、その事でキリストの体である神の家族の交わりが気薄になり、寂しさを感じるようになりました。

三密を避けなければならない中で、どうやったら同じ場所で礼拝をすることが可能になるかと考えたのが、今でも継続して主流化したのが「グループ分け礼拝」です。

教会員を2つのグループに分け、1つのグループは約束事に協力して頂くことで実際に教会に来て礼拝に参加し、もう1つのグループはオンラインで参加をする。これを交互に行い、全ての信徒さんが教会に足を運べる環境を作り、数ヶ月毎にグループのメンバーを入れ替えていくようにしました。実際に教会に来るかは各信徒さんの判断にお任せをしていますが、9割が自分のグループの参加日には教会に来る事を選択されました。

すると、コロナ前と変わらない霊的一致が表れるようになったのです。また、それ以上に皆さんの信仰成長が増し加えられました。

コロナ禍であるからこそ生み出した教会の在り方は、どこにいても、どんな状態でも、またグループ礼拝という在り方でも神様と神の家族との関係がより良い導きへと変えられていることを感じます。また、伝道に対しても、今の時代の波によって、日にちや場所を選ばずインターネットを用いることで、いつでも、どこでも、無制限に誰にでも主を伝えることができるのが今現在だからこそ可能になった伝道法だと思います。

見える形では不安に思い、先が見えないように思えても、コロナ禍を経てこそ気付かされたのは、主はどんな時でも常に私たちを最善に導いてくださっているのだということです。その主にこれからも導かれながら進む教会に期待していきます。





TSUBASA YAMASHITA

シオン宣教団
都来（とらい）チャーチ 牧師

山下 翼

コロナ禍を通して失ったもの 与えられたもの

ハレルヤ！主の御名をあがめます！私たちの教会はこのコロナ禍を通して、2つの大きなものを失いました。しかし、それにも勝る大いなる恵みを主は与えて下さったのです。

このコロナ禍を通して私たちが失ったもの、その1つは会堂です。

私たちは、あるビルの一室を借りて2011年に開拓をスタートした教会です。それから9年もの間、ずっとそのところで礼拝していたのですが・・・コロナによって経済的に難しくなり、ついにはそのところから撤退しなくてはいけなくなったのです。そしてしばらくは貸会議室を借りて礼拝を捧げる日々が続くことに。主は一体私たちをどこへ導こうとしているのだろうか。進むべき道が分からなくなり、失望にも似た思いが私の心を支配したのでした。

しかし主はそんな時に、思い切って土地を買い、会堂を建てるようにと示して下さいました。そこで、私たちは自分たちが住んでいるマンションを売りに出すことに決めました。さらにはシオン宣教団の先生方にもその土地と一緒に来ていただきて祈っていただきました。すると、ついに去年の春！主は新しい場所、



新しい会堂、また移転に伴って新しい名前を私たちの教会に与えて下さったのです！しかもその名前というの、は黙示録 21 章から与えられたのですが、まさにこの世の終わりの時代にふさわしく、さらにはこのラグビーのまち東大阪にぴったりな名前だったのです。

「更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。」ヨハネの黙示録 21.2

また主はその献堂礼拝に東大阪の市長を送って下さるといふ粋な計らいまで！与え、主なる主をただただあがめます、ハレルヤ！

このコロナ禍を通して私たちが失ったもの、その 2 つ目は、私たちの教会で行っていた中心的なミニストリーです。実は私たちは路傍伝道とドッジボール伝道を中心に成長してきた教会ですが、コロナによりその継続が難しくなったのです。しかし、主はまたそこで新たなミニストリーを与えて下さいました。それが飲食店ミニストリーです。駅前や公園へと、伝道しに出かけていくのは難しくなったけど、飲食店をすれば、ノンクリスチャンの方からやってきてくれるのでは！店名は「メシヤ」にしました！売りはラグビーボール型のオムライス、その名も「ラグオム」(←商標登録済)！するとなんと！オープン初日から行列ができたり、東大阪市のマスコットキャラクター「トライ君」が来てくれたり、また関西テレビの「よ〜いドン」という番組が取材に来てくれ「となりの人間国宝」に認定されたり！さらにはその年のクリスマスには、コロナ禍であったにも関わらず、120 名を超えるノンクリスチャンが集ってくれたり、日々の礼拝にもお客さんが集って下さるようになったり！！主がしてくださることにただただ興奮しっぱなしの毎日なのです！

そして今私が与えられているビジョンは・・・ラグビーのまちに、次から次へとシオン宣教団の教会を産み出すということ。「メシヤ」のレシピを全て志ある献身者にあげ、平日はメシヤを、日曜日は教会をとという新しい教会のあり方で日本のリバイバルに貢献させていただきたいという願いが今起こされているのです！

これからも、これまでのやり方に固執することなく、さらには一日も早くコロナ前に戻ることを願うのではなく、主が開いてくださる新しい道を前進し続けたいと思います！どうぞ引き続き、シオン宣教団のためにもお祈り下さいますようお願い致します！





EIJI KOYAMA

単立ペンテコステ教会フェローシップ
栄シャローム福音教会 牧師

小山 英児

新しい世代の挑戦に耳を傾け

10年ほど前のことです。当時10代の長男が「教会の礼拝の動画配信をしたい」と言いました。その時は、説教の音声配信はしていましたが、映像での配信の必要性を感じていませんでした。しかし、長男の熱意に、役員会も承認し、iPhone を使った配信が始まりました。その後、CGNTV で礼拝説教の配信をすることとなり、良いビデオカメラで配信できるようになりました。メディアに長けた兄弟姉妹たちも加えられ、配信は充実していきました。そんな中でコロナ禍がやってきました。もし、それまでの配信の蓄積がなければ、礼拝のライブ配信などを考えることは難しかったと思います。新しい世代の挑戦に耳を傾けて、新しい時代に備えていく姿勢が大事なのだと思わせられました。聖霊様は思いのままに吹きますから。緊急事態宣言やまん延防止などの緊急時に、教会での対面を中止し、YouTube によるライブ配信のみに速やかに変更できる体制を整えることができた背景にはそのような備えがありました。今後の課題としては、配信を誰もが担当できるわけではないので、奉仕者をどう確保するかです。

コロナ禍を経て、今一番感じていることは、対面礼拝の素晴らしさです。共に集まり、主に礼拝をささげることがどんなに素晴らしいことかを改めて感じています。伝道もオンラインを使っただけの種まき伝道をし



ていますが、対面には変えられないものも感じています。

一昨年、私は新型コロナに罹患し、重症化し、生死の境を彷徨いました。小さな教会で、牧師が突然いなくなることは、多くの混乱をもたらしました。牧師しか知らないことがたくさんあったからです。コロナ禍を経た教会のあり方として、牧師しか知らないということのをいかに減らしていくかということも挙げられると思います。そのような中で、教会ではライングループも作ることができ、ラインが使える兄弟姉妹とのコミュニケーションをとることができるようになりました。しかし、ラインが使えない兄弟姉妹とのコミュニケーションは課題です。

退院後、近所の未信者の方が話かけてくれました。「最近、教会の人たちを見かけないけどどうしているのだろう」と家族と話していたら、その方の息子さんから、「教会の YouTube の礼拝動画のリンクが掲示板にあるから、それを見てみたら」と言われたと。そして、YouTube を通して私がコロナに罹患したことを知ったと。退院した私の顔を見て、とても喜んでくれました。情報公開をどのように進めていくか難しいところです。反応に関しても地域差があると思います。しかし透明性を大切にすることによって思った以上に地域に安心感を与えることができたと感じています。礼拝もその後時々ご覧になっている事を伺い、配信が地域の方に対する伝道の一つのツールになっていることも実感しています。

「見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いですと私たちは思います。あなたがたはヨブの忍耐のことを聞き、主によるその結末を知っています。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられます。」(ヤコブ 5:11)

コロナ禍もマイナスなことばかりではありません。コロナ禍で現地を訪問することができなかつたため、バングラデシュの貧しい子どもたちのための教育養護施設、ホーム・オブ・ピースと Zoom での交流会を開催することができました。Zoom というツールのおかげで、より多くの人たちが現地の子どもたちと交わることができ、知ってもらうことができました。

TPKF では現在 (2022 年 3 月) 会議はほぼすべて Zoom で行っています。大会も YouTube 配信や Zoom で行っています。

良い面と悪い面がありますが、現代のツールを用いての宣教協力の大切さも感じています。





YOSHIO SANGA

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
理事・事務局長

三箇 義生

コロナ禍を経た教会のあり方

「しかし神は、私の行く道を知っておられる。

私は試されると、金のようになって出てくる」 (ヨブ記 23 章 10 節 新改訳 2017)

2020 年から始まった新型コロナウイルス感染拡大 (COVID-19) は、2022 年入り第 6 波を数え、累積の陽性者は 6,364,132 人、死亡者の累積は 27,759 人 (2022 年 3 月 29 日現在) となっています。当教団でも第 6 波に入り、1~2 月には連日のように全国の AG 教会から感染報告がありました。現在は少し収まって来ている印象です。

上記のように、感染拡大は完全な収束とは至ってはおりませんが、「コロナ禍を経た教会のあり方」について、教団としてそのような総括してはおりませんので、私見としての考察を記します。

「ピンチはチャンス」という言葉がありますように、新型コロナウイルス感染拡大という災禍をいかに宣教拡大の機会へと変えられるかが、重要と考えて来ました。

2020 年 5 月、政府の専門家会議から「新しい生活様式」が提言され、「3つの密 (密閉・密集・密接) の回避」、「人との接触を 8 割減らす」等が推奨されました。求められる対策に対応することは社会全体にとっても、そして教会にとっても大きな課題であり、これまで当たり前であった信仰生活や教会生活、教会の働きを揺るがすことになりました。

(1) コロナ禍が与える影響

「Crisis Reveal クライシス・リビール」という言葉があります。「危機的な状況が発生すると良いものも、悪いものも加速する」という現象を意味するそうです。東日本

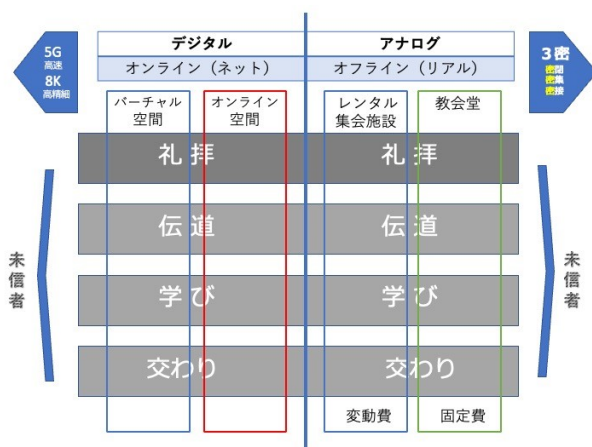
大震災では、被災地に潜在的にあった高齢化による問題が加速し、支援を通しての宣教に可能性を見いだした教会の宣教が加速しました。コロナ禍においても、教会の高齢化の問題が加速し、オンライン化に対応し、オンライン化を活かすことのできた教会の宣教が加速しました。コロナ禍にあって、日本の教会の抱える課題と可能性が顕在化し、それとどのように向き合っていくかで、コロナ後の教会のあり方が変わっていくように思います。

(2) 改めてその意味を知り、価値を知る

「3密の回避」の推奨によって、教会の礼拝、伝道、交わり、教育、奉仕という働きのあり方が問われることになりました。JEA（日本福音同盟）の神学委員会は2020年5月と2021年11月に「心をつなげて福音の信仰のために」～新型コロナウイルス時代を生きる教会～パート1と2を発行し、神学的な考察をエッセーにまとめました。そこでは教会の可能性を信じつつも、変えて良いもの、変えてはいけないものを見分ける洞察力の大切さが語られ、いっしょに集まれないからこそ「いっしょに集まる」ことの大切さや重要性を改めて聖書から学び、インターネットを介する故に、礼拝や聖餐の本質が問われています。コロナ禍にあって、教会のあり方とその働きのあり方に真剣に悩み、そこで改めてその意味と価値を見いだした教会こそ、コロナ後の教会と宣教を牽引して行くのではないのでしょうか。

(3) オンライン化対応がもたらすもの

先のJEA神学委員会の神学的考察のエッセーでは、ICT（情報通信技術）による身体性の「拡張」の可能性と限界について触れられています。多くの教会が3密の回避しつつ、礼拝、伝道、教育、交わり、奉仕という教会の働きを継続するために、オンライン化に取り組みました。それらの取り組みを通して、限界を認めつつも、その可能性を活かすことが重要と考えます。オンラインによる宣教は従来の宣教に比べ、「距離の問題」「人材の問題」「コストの問題」を解決すると言われます。従来型の宣教とオンラインによる宣教の長所を活かしたハイブリッド型宣教がコロナ後の教会のスタンダードになって行くように感じます。今後一層、オンラインによる宣教論が活発になることを願っています。





KATSUYUKI SHIGEMOTO

日本オープンバイブル教団
三田ホーリーチャペル 牧師

重元 勝行

コロナ禍の教会と次世代の信仰成長

主イエス キリストの御名を賛美します。2020 年より、世界に拡大した新型コロナウイルスによるパンデミックにより、世界経済、社会の様式の対応が求められ、私たちの日常は、オンラインの対応が身近なものとなりました。

それらは教会の中においても例外ではなく、週毎に集まる主日礼拝、祈禱会など、共に食事をし、交わりをもつ事が祝福であった事を再認識させられました。

1. 旅路には危険が伴う

感染が拡大する中で、ある牧師達のミーティングに参加させていただき、セミナーの中で講師の先生が、「コロナ禍にある教会ついて、人生は旅路であり、旅路には危険が伴いますね。」と語られた言葉に心が留まりました。

教会共同体が旅路を歩む時に、コロナウィルスという一時的なトラブルに遭遇した時、どのように物事を捉え、対処すれば良いのか、私たちはコロナ禍の中にあっても、創造主である神様は良いお方であり、どんな時でも主に信頼し、目を向ける事ができれば、コロナ禍という苦難を通して、信仰が精錬される時として、受け入れる事が出来るのではないのでしょうか。

教会の主人は、大牧者であられる主イエスキリストです。このお方は、旅路に危険が伴った時に羊達をあらゆる危険から守り、群れを安全な場所へと導かれるお方です。

“ 主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ いこいのみぎわに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ 御名のゆえに 私を義の道に導か

れます。たとえ 死の陰の谷を歩むとしても 私はわざわざを恐れませんが、あなたが ともにおられますから。” 詩篇23篇1～4節

2. アライメント

コロナ禍で、対面・オンライン礼拝が続く中、時間をどのように使いましょうか。と祈る中で、教会で数年呼びかけてきた弟子訓練を、この時期だからこそ、オンラインで出来ないだろうか・・・という思いが与えられました。アライメントは、“調整する、協調”という意味があります。車などに使われる言葉ですが、以前、韓国の教会で牧会セミナーがあった際に、教会の教職と信徒が、車の車軸と車輪のような関係であり、教会が共に前進していく為には進むにも、止まるにも、一致が必要であり、同じ方向を向いていく必要があります。と仰っていました。私たちの教会では、韓国オンヌリ教会から発信されている“一对一弟子養育訓練”を本部教会の神戸キリスト栄光教会で、すでに 100 名以上の教職、信徒達が訓練を受け、養育者（メンター）となり、同伴者と養育訓練の恵みに与っています。キリスト教会において、御言葉が分かち合われ、共に祈り、交わりを持つ中で、御霊によって神の愛が実践され、コロナ禍にあっても、教会の霊的な筋肉は強められます。

3. 次世代の信仰成長

コロナ禍により、年に2度対面で開催されていたユースキャンプはコロナ禍の影響により2年間オンライン形式（各会場にて聖会等を実施）で開催されていました。キャンプの準備は、ZOOM や LINE によるオンラインミーティングにて、集会は YouTube と Facebook の Live 発信併用等により、場所を越えて同じ御言葉から各教区で励ましを受け、それぞれの教会にてメッセージの分かち合いをするなど、オンライン聖会特有の恵みに与りました。オンラインミーティング化が加速したのはコロナによる副産物ですが、対面聖会での活きた聖霊様の圧倒的な臨在と、恵みには、やはり代え難いものがあると思われています。

教会の将来を担うのはユース世代、若者達です。彼らが、右にも、左にも反れる事がないように主に従って歩む為には、必ず聖書の言葉が必要です。コロナ禍において神様から知恵をいただき、オンラインツールを使いながら、次世代の信仰の成長の為に、福音を届け、お仕え出来れば幸いです。

（写真は2021夏のユースキャンプの様子

講師：山下翼 牧師 都来チャーチ）





IZAYA YATSUZUKA

日本チャーチオブゴッド教団
宣教局

八束 慰也

コロナ禍を経た教会のあり方

2019年、主はマタイ福音書28章18～20節に記されている大宣教命令の御言葉に基づいて、私たちの教団に3つの教会開拓と宣教者派遣という“Vision2022”を与えてくださいました。このビジョンに従って教団の諸教会は一致して渋谷、道玄坂の地に開拓を始めることができました。コロナ禍にあってその展開は願っていたようなものではありませんでしたが、それでも着実にその地で礼拝と祈りがささげられ、日本若者文化の中心でもあるスクランブル交差点において毎月のように宣教が続けられています。また、それ以前にも長年祈りが積まれていた埼玉県、春日部の地において春日部グレイスチャーチがスタートしました。既にそこから救われる魂も興されています。救い主の御名をほめたたえます！

また、その他の教会においても宣教のために配信機材を揃えたり、内装工事をしたり、教会の場所を新たに開放したりしています。これまでの在り方に留まったり、以前に戻ろうとしたりする姿勢ではなく、主の御霊の力によってこの御国の福音を一人でも多くの方に届けたいという情熱が増し加えられています。

「いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそ



礼拝での祝福の祈り

うしようではありませんか。(ヘブル 10:25)」とある通りに出来るだけ小さく集まることを土台としながらも、コロナ禍を経て教会の向かう方向性としては、主が最初に「聖であるとされた時」(創世記 2:3)を共有し続けることだと考えています。つまり、場所を越えることの出来るオンラインを有効に用いていくことです。①教会の使命実現の為に用いる、②主にささげる礼拝のために用いる、③弟子を生み出す宣教のために用いる、という3つが目指す方向性だと思われています。

①各教会の地域の人々は、主の計画の中で、その人々を通してキリストの栄光を現わすために集められました。各教会が主から受け取っている使命やビジョンがありますが、それを実現するためにオンラインを用いていくことが大切だと信じています。ともすると各人のニーズを満たすためにオンラインを用いることになりがちですが、主の教会ですからオンラインもその使命のために方向付けることが肝要です。

②オンラインでの礼拝はとかく気が散りがちです。普段の生活圏にいるのですから当然ではあります。しかし、礼拝は主への真心からのささげもの、誰の為でもなく主のための礼拝なのです。目には見えない主をいつも目の前に置き続けること、その姿勢で在り続けることを教会として繰り返し受け止めて、主が求めておられる礼拝者(ヨハネ 4:23)へとキリストのからだを整えていきたいものです。

③大宣教命令に明らかなように、宣教の目的は造られたすべての者に御国の福音を伝え、キリストの弟子を生み出すことです。何よりもこの弟子を生み出すために用いるということが大切だと考えています。弟子とはキリストにすべて従う人であり、この世の流れとは真逆です。しかし、主に知恵をいただきながらこのことをターゲットに据えて、オンラインでも宣教のために「出て行き」と願っています。

主は、送り出した弟子に対して「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。(IIテモテ 4:2)」と励ましておられます。時代や情勢は刻一刻と変化していきますが、みことばが真実であることが更に明らかになっていますから、その成就、実現のために堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励んでまいりましょう。(Iコリント 15:58)





TADASHI NAKAGAWA

日本ネクスト・タウンズ・ミッション
ベテルリバーサイドチャペル 主管

中川 正

オンラインを活用した反転型聖書研究

コロナ禍により、私たちの教会も、YouTube や Zoom を併用したハイブリッド型の礼拝を行っています。教会への来会者は減りましたが、教会を離れていた兄弟姉妹や、海外に在住している教会員などもオンラインで礼拝に参加してくださるようになりました。同時に、教会における聖書の学びや宣教の質的変化が進んでいることを実感しています。

2020 年 3 月に、教会開拓者である前牧師の召天により、私は責任を引き継ぎましたが、同時に地方大学の教員としての仕事も続け、大学における教育改革にも携わってきました。大学でかかわった教育変革ムーブメントの一つに「反転学習」があります。オンライン授業のリソースが次々と生まれてくる現在、それを敵対視するのではなく、積極的に活用しようとする動きです。「大学が基本を教え受講生が各自で応用を考える」という従来型学習を反転させ、「オンラインで基本を学びクラスで応用力を実践的に鍛える」というプログラムが生まれてきたのです。

私は、高齢であった前牧師の補佐として按手礼を受けた 2017 年から、このような大学の変化を教会に適用できないかと模索してきました。従来、教会では週に一度礼拝メッセージを通して聖書の基本を教え、その適用に関しては個人任せでした。しかし、適切な導きがなければ実生活に聖書の真理を適用することは困難です。聖書の学びにオンラインを活用し、適用をファシリテートできる反転型聖書学習の可能性を模索していたところ、日本にも目覚ましい実績をあげている働きを見つけました。中川健一師が主催しているハーベストタイムメッセージステーションを通したミニストリーです。

当時でも、聖書の基礎に関する教えや、聖書各書の講解などのライブラリーが数百あり、毎月数十万ものアクセスがありました。また、分かち合いのファシリテーションの訓練を受けたリーダーを核として、視聴者たちが聖書フォーラムやバイブルスタディなどの集いを定期的に行っているという働きは、反転学習のムーブメントのキリスト教界版だと気づきました。私は他の2名の教会員とともに、同ミニストリーが主催する「聖書塾」で2年間にわたる訓練を受けるとともに、地域の牧師たちの了解も得て、教派を超え未信者も歓迎する反転学習型バイブルスタディを2020年2月より週一度開催することにしました。対面で一か月行ったのち、コロナ禍によりズームを用いた方法に切り替えましたが、それ以来、毎週十人前後の参加者を得て継続しています。

地域教会外に反転学習型バイブルスタディを取り入れた効果は絶大でした。日曜礼拝だけの聖書の教えではカバーできない聖書の学びを定例化したことにより、参加者の聖書理解が深まりました。バイブルスタディのグループLINEでは、学びの疑問点が共有され活発な議論が交わされています。私たちの教会では、前牧師の時より毎月最終日曜日は信徒役員が講壇の奉仕を担当してきましたが、バイブルスタディへの参加により、メッセージが深まり充実しました。また、今まで教会に足が向かなかった未信者の方や、地域教会に所属できない信者の方が、時折日曜礼拝に訪れてくださるようになりました。さらに、私たちの教団に属する教会の牧師が入院された時には、牧師夫妻の了解を得て会員をバイブルスタディにお誘いしました。今、その教会の会員2名が毎週参加してくだり距離を超えた交わりを行っています。無牧の教会が増えることが予想される時代に、多様な形態の反転型聖書研究を取り入れることは、地域教会に新たな可能性を開いていくのではないかと私は期待しています。





YOSHIAKI MASUI

日本フォースクエア福音教団 総理
函館シオン教会 主管牧師

増井 義明

コロナ禍を経た教会のあり方

パンデミックにおける牧会は困難とチャレンジであると同時に私にとって大きな気づきを与え与える機会となりました。2020年にコロナが始まった時は戸惑いの中、礼拝自粛に伴い信徒の方々にみことばを届けようとメッセージを手紙で郵送し、オンライン礼拝など様々な方法で皆さんを励まし、教会の働きに取り組みました。当初は神様がコロナ禍において、必ず何かして下さると希望を持っていましたが、人は救われない。新しい人と繋がる機会も持てないという現実が続き、次第に希望を失いかけ、神様のビジョンに前進できないと諦めかけた時期がありました。

しかし昨年アメリカ人の教会コンサルタントの方との会話を通して、牧会のあり方についてももう一度祈り考えられる機会となりました。コロナによって集まれず皆さんを効果的に励まし、弟子として育てる難しさ、特に人と関わるのが制限されているので、伝道はできない中で一体何ができるのかと質問しました。その方は「コロナが問題ではない、人が集まることを止めたが、それによって神様の働きが止まっているのは牧会のあり方に問題があるのでは」と指摘されました。信徒が神様としっかりと繋がり、聖霊に満たされ、聖霊の導きに応える信徒を育てていけば、互いに励まし合い、置かれている環境においてイエス様を示し、ゆっくりでも福音は広がっていくのです、と言われたのです。

会話後に思い出したのは、初代教会が急成長している中で迫害に遭った時の聖書箇所です。当時の信徒は迫害が終わるのをただ待っていたわけではなく、行く所行く所で福音を宣べ伝えたと書かれています。迫害によって福音は止められたのではなく前進した教会の

姿を読んだ時に、コロナによって主の働きは止められないという確信を得て、コロナ禍にある教会に対する考え方が180度変えられました。そしてコロナで表面化された、教会に集まる活動に頼っていた牧会から、信徒が聖霊に満たされ、導かれ、与えられている使命を行えるように整える働きに転換する必要を覚えています。

現時点で具体的にどのような方法でこれらを実践するかははっきりしていませんが、進むべき道は示されたことに期待が増しています。これからは共に集まり礼拝し、交わり、学びを続ける中で、どのように信徒一人一人が聖霊様に満たされ、主の声を聞き実践できるのかという目的を中心に進んでいきます。

コロナ禍が少しずつ元に戻りつつある中でコロナ前の考え方と方法に戻るのではなく、何が起きてもおかしくない時代にこそ世の光として輝き、主の働き手となる教会を形成していきたいと願います。





ISSEI YOSHIDA

日本ベテルミッション
久留米ベテルキリスト教会 牧師

吉田 一誠

コロナ禍を経た教会のあり方

この2年間、コロナ禍の中で、教会が篩にかけられているように思います。それまで当たり前だと思っていた、昼食を共にすること、交わり、教会で憩う時間、また、セル・スモールグループで集まること等、さまざまな活動が制限され、一同集まって礼拝するという私たちの一番の楽しみと喜びが奪われました。感染拡大の初期の頃は、集まることをやめ、完全にWEB礼拝に切り替えました。その後も日曜日の礼拝を4回に分けて行われ、感染者が出るならば、WEB礼拝に切り替えられ、緊急事態宣言や、蔓延防止等が告げられるたび、礼拝をどのように行うか話し合われ、感染を防ぐことを意識せざるをえませんでした。それは、世の中がコロナ対策に追われて教会もそのパニックに巻き込まれていたと思います。

そんなコロナ禍の中で、「教会のあり方」というものを見つめ直す必要が出てきました。去年の7月、私たちは礼拝のWeb配信も並行して続けつつですが、集まって礼拝することを宣言し、礼拝は二部礼拝にしました。コロナ禍だからとかそうではなく、何が大切なのか、守るべきものは何かを明確にし、教会は礼拝を中心とし守り



行うことが、使命であり、教会の存在意義であることを再確認しました。

・集まることをやめない

ヘブル 10:25 「ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」

みことばに励まされ、礼拝を守るために生活を自粛し、1週間を礼拝のために過ごす、聖別された生活をしていくことを確認し、コロナ禍を通る中で、ますます教会が強められ、成熟していくためのこの困難なんだと、教会全体で受け取りました。それまで、教会員の礼拝に対する意識は個人のための礼拝だったように思います。しかし、この困難によって、礼拝が自分だけのためでなく、教会に集う兄弟姉妹のため、みんなが安心して礼拝に集えるため、教会が礼拝を行い続けていくために、礼拝を中心とした生活をするんだという、「共同体意識」が与えられています。教会の一致ということが、単に vision のために一緒に祈り行うというところにとどまらず、「共同体」として聖別されて生きることに意識が向けられていることに感謝しています。





SAKAE YOSHITSUGU

日本ペンテコステ教団
生駒聖書学院 院長

榮 義嗣

コロナ禍を経た教会のあり方

2021年3月1日に生駒聖書学院院長に就任しました榮義嗣です。コロナ禍の中の院長就任と働きになりましたが、教えに来てくださる先生方や、神学生の祈り、多くの方々の祈りにより支えられ、守られてきました。

前院長榮義之（現在名誉院長）は2020年3月16日に脳梗塞で倒れ、3度の手術とリハビリを行い、7ヶ月後に退院することができました。丁度、緊急事態宣言下中の入院生活でした。家族も面会禁止で、父は孤独の中、みことばを告白し、神様とともに歩む日々を送りました。電話口で、「聖書を読んでくれ」とリクエストがあり、聖書を読んで聞かせることもありました。退院しましたが、脳梗塞の後遺症のため、言語障害、運動機能の低下のため車椅子での生活をしており、現在もリハビリを続けています。昼間は自宅で過ごし、夜は施設で過ごしています。月に2回は教会の礼拝に参加し、メッセージを代読で聖書のみことばを教会員に届けています。引き続き榮義之のためにお祈り下さい。

生駒聖書学院では感染対策をとりながら、2021年度は朝のチャペルにおいて猛声祈禱を復活しました。そして対面での講義が保たれてきました。コロナ感染から守られ、学院を閉鎖することなく、学びが滞りなく行われてきました。

神学生の伝道実習においては、一学期は生駒市全域へのトラクト配布、二学期は動画作成をしてYoutubeでの伝道とトラクト配布。三学期は、コロナ感染が拡大している時期ではありましたが、路傍伝道をマスク着用とフェイスガードを装着して、近鉄生駒駅と近鉄東生駒駅で行いました。トラクト配布と個人伝道において、多くの方に福音を語り、救いに

導くことができました。一人でも多くの方にイエス様の福音を宣べ伝えようと、伝道が続けてきました。ソーシャルディスタンスで対面での伝道が難しい時代です。しかし、方法はたくさんあります。コロナ禍であるから伝道できない。伝道しない、ではなく、コロナ禍ではあるけれども、できる範囲で伝道が続けていく時に、福音の広がりを見ることができました。ネットの活用も必要不可欠となってきています。今後は、コロナ禍で失われてきた教会の活動を取り戻していくことになっていきますが、忍耐しながら、祈りつつ伝道が続けていきたいと願っています。

2022年2月28日(月)に第69期生駒聖書学院卒業式を行い、本科生5名、通信科生4名が卒業しました。卒業生の兼光伸一兄は卒業と同時に東京都稲城市に「愛と赦し恵みキリスト教会」を開拓伝道。また通信生で卒業の金炳國、聖愛夫妻は、2020年8月から奈良県奈良市に「主の教会」を開拓しており、この3名は3月28日の教団牧師総会において、伝道師按手が行われました。そして教団加入となりました。この厳しい時代にあって、新しい教会が生まれ、教団に加入というニュースは私たちにとって励みであり、とても嬉しいことです。

生駒聖書学院の働きのため、日本ペンテコステ教団各教会の伝道の働きの祝福のためお祈り下さい。





HISAYASU KONDO

フルゴスペル(純福音)日本総会
フルゴスペル山形教会 牧師

近藤 久靖

コロナ禍を経た教会のあり方

イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。さまざまの異なった教えによって迷わされてはなりません。”(ヘブル 13章 8～9節前半)

コロナ禍を経た教会のあり方の本質は何も変わらない。むしろ、変えるべきものではなく、追求し、極めるべき。教会の本質、それは集会に於ける神への礼拝である。

2020年1月末、某クルーズ船での集団感染がニュースになった頃、各店の陳列棚からマスクと消毒が消え始める。嫌な予感がし、店員に尋ねまくるもこれといった返答がない。諦めずに尋ね続けると、とある店員の一人が「コロナで在庫がなくなり、入荷見込みがまったく立たないんです」と教えてくれた。「やはりか！」と嫌な予感が危機の確信に変わった。次の主日礼拝後に緊急臨時総会を開き、コロナ感染拡大の危機と拡大後の方針を話し合い、以下のように礼拝継続を決めた。

まずは、感染と拡大に差し当たり集会是非を議論し合った。マタイ 22:39『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』だから、隣人を守るためにもここは涙を飲んで集会を一時休止すべきという意見も出た。が、その前に『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。(マタイ 22:37～38) とあるのだから、どのような事があっても、やはりまずは神さまを第一にし、その御

前に集まることを大切にしよう。『わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる』（マルコ 11：17）ともあるのだから、むしろ、このような時だからこそ教会は門を開け続け、集まって祈るべきで、世界が苦しむ状況なのに教会が集まって祈らなくてどうするのか！ よって、各集会等の礼拝を継続する。そのためには、①如何なる犠牲も払う。②感染防止対策を徹底する。③感染防止のため愛餐会を廃止する。④地域住民配慮する。⑤礼拝数を増やして分散型集会にし、密を避ける。⑥礼拝をネットでライブ配信する。⑦各自の信仰、及び事情を互いに理解し合う。⑧お互いに連絡し合い関係を深める。⑨もし感染者が出ても絶対に裁いたり、非難したりしない。⑩今まで以上にお互いのことを祈り合う。

2021年クリスマス前～年明け2月の終わりまで、全国的な大雪。近隣のご年配方々が仰るには、「全国的な大雪と言うけど、こんなのは生まれて初めて」だと。コロナだけではなく、豪雪地域や山間部から来られる聖徒さんたちは、毎礼拝が命がけである。それでも、私たちの主への礼拝は変わらない。ささげ続ける。大雪も終わらぬ間に、今度はロシアによるウクライナ侵攻。侵攻すると分かってはいたものの、いざ起きるといろいろな影響が出始め、またストレスが増えて来ている、、、それでもやはり、私たちの主への礼拝は変わらない。ささげ続ける。それでももう直ぐ桜だというときに、3.11に次ぐ大きな地震で大変な被害が。それでも、それでも、私たちの主への礼拝は変わらない。ささげ続ける。

ある感染症の学者が感染拡大初期に仰っていた。「これはあくまでも予行練習だと思ってください。なぜならば、将来もっと凄いウィルスが来るのですから」まさに、再臨の主キリストをお迎えするこの世の終末に向け、教会と各自の信仰のあり方が問われるコロナ禍であった。“さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられ、”（ルカ 9章 51節）同じく私たちも主イエスの再臨に顔をまっすぐ向けて歩み続けていきたい。主がご再臨なされるまで。



■ 日本ペンテコステ協議会総会雑感

日本ペンテコステ協議会 書記 八束 選也

ERIYA YATSUZUKA



2021年11月18日(木)午後1時半より、オンライン(Zoomを使用)にて日本ペンテコステ協議会総会が開催されました。12教団から計21名の参加者と、JPNを代表して細井眞師も参加してくださいました。

土屋潔議長が、使徒4章33節「主イエスの復活を非常に力強くあかしした」とのみことばにより、コロナ感染拡大で教会の本質が問われており、人々は神学ではなく、生きたキリストを味わいたいと願っていることが指摘されました。今、私たちの目の前にいる人が必要としている復活のキリストを大胆に語ってほしいと励ましてくださいました。

前回議事録、2021年度活動および会計報告について説明があり、監査の樋口章代師の報告の後、2021年度の活動報告と会計報告は満場一致で承認されました。続けて以下の2022年度の活動計画について確認がなされました。

日本ペンテコステ協議会研修会

日時：2022年 6月10日(金) 時間未定

場所：日本AG教団 中央聖書神学校チャペル(又はZoomオンラインミーティング)

会費：1,000円

テーマ：コロナ禍を経た教会のあり方

JPC ニュース担当：日本フォースクエア福音教団

日本ペンテコステ協議会総会

日 時：2022年11月17日（木）12：00～16：00

場 所：日本AG教団 中央聖書神学校チャペル

（対面での総会が開催できるかどうかについては今後の役員会で決定）

2021年度会計予算について、会計の吉永豊師より一部訂正があることが報告され、修正の後、2022年度の活動予定と会計予算は満場一致で承認されました。その後、「今後のJPCに期待すること」について活発な討論の時間が持たれました。生きた福音を語るために先輩の知恵を聞く場、教会運営に必要な法規的な面での情報交換の場が必要などではないかとの意見が出され、今後、JPC役員会で取り纏め、所属教団の祝福となる実践を探っていくこととなりました。また、JPN代表の細井師より、翌日19日に開催されるJPN懇親会では、大嶋重徳師（鳩ヶ谷福音自由教会牧師）が講師として、「次世代への宣教・次世代の育成」というテーマで語ってくださると報告がありました。その後、各教団の聖会等の案内がなされ、最後に中見透師の祈りを持って総会は終了しました。

■ JPC 規約

- 1) 本会は、名称を『日本ペンテコステ協議会』(Japan Pentecostal Council 略称 JPC)とする。
- 2) 事務局
本協議会の事務局を日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団本部に置く。
- 3) 目的
本協議会の目的は、日本におけるペンテコステ信仰の健全な成長と発展を促進するために、ペンテコステの教団及び教団に準ずるグループの指導者・教職者間における交流を深め、情報交換及び相互理解を図り、教職研修を行うことにある。
- 4) 信仰宣言
本協議会の構成員は、以下の信仰宣言を告白するものとする。
 1. わたしたちは、聖書が靈感された、唯一の誤りのない権威ある神の言葉であることを信じる。
 2. わたしたちは、父と子と聖霊の三位において永遠に存在される唯一の神を信じる。
 3. わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの神性、処女降誕、罪のない生涯、奇跡、十字架の血による代償的贖罪的犠牲、肉体をもつての復活、父の右の座への高挙、また、力と栄光の中での再臨を信じる。
 4. わたしたちは、失われた罪人のためには、みことばと聖霊による新生が不可欠であると信じる。
 5. わたしたちは、異言の証拠を伴う聖霊のバプテスマを信じる。
 6. わたしたちは、聖霊の今日的働きによる肉体の癒し、および種々の聖霊の賜物を信じる。
 7. わたしたちは、聖霊の内在によって清い敬虔な生活が可能となることを信じる。
 8. わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストにおける信者の霊的一致を信じる。
 9. わたしたちは、聖徒の復活、失われた者の審判、新天新地を信じる。
- 5) 活動
定期的に会議を開催し、各教団及びグループの指導者・教職者間の交流、意見・情報の交換、研修その他必要な活動を行う。広報誌と機関誌を発行する。
- 6) 総会
本協議会は最高議決機関として総会を置く。総会は、加盟教団にそれぞれの教会数に応じて割り当てられた数の代議員によって構成する。
50 教会以下 代議員 1 名 51～ 100 教会 代議員 2 名 101 教会以上 代議員 3 名
- 7) 役員
本協議会に議長、副議長、書記、会計を置き、その任期を 3 年とする。役員会は議長によって召集され、定期的に開催する。
- 8) 監事
本協議会に監事を置き、その任期は役員の任期に準ずる。
- 9) 経費
本協議会の経費は、加入団体の負担とする。
- 10) 附則
本規約は、1998 年 5 月 29 日より実施する。この規約の変更は総会の議決を経て実施する。
本規約は、2003 年 3 月 25 日および 2014 年 11 月 27 日に改正された。

■ 2021 年度会計決算報告書

日本ペンテコステ協議会(JPC)2021年度会計決算報告

2020年11月1日～2021年10月31日

収入の部				支出の部			
項 目	予 算(21)	決 算(21)	備 考	項 目	予 算(21)	決 算(21)	備 考
協 力 金	500,000	460,000		総 会	40,000	0	
一 般 献 金	100,000	7,000		役員 活動費	180,000	1,300	
研修会礼拝献金	80,000	26,000		研 修 会	200,000	20,000	
研修会 会費	180,000	49,000		PWF 負担金	60,000	62,290	500米ドル +送料(6,500円)
雑 収 入	0	6		PAM 負担金	60,000	0	
				JPCニュース	115,000	106,258	編集・発送含む
				新 聞 広 告	75,000	59,400	
				事 務 諸 費	20,000	6,103	
				PWC参加積立	50,000	50,000	
				予 備 費	60,000		
小 計	860,000	542,006		小 計	860,000	305,351	
前年度繰越金	1,242,635	1,242,635		次年度繰越金	1,242,635	1,479,290	
合 計	2,102,635	1,784,641		合 計	2,102,635	1,784,641	

<協力金納入団体>

	納 入 額	
神の家族キリスト教会	20,000	2022
単立ペンテコステ教会フェロースhip	50,000	2021
日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団	150,000	2021
日本チャーチオブゴッド教団	50,000	2021
イエス・キリスト福音の群	20,000	2021
日本ネクスト・タウンズ・ミッション	30,000	2021
日本フォースクエア福音教団	40,000	2021
シオン宣教団	20,000	2021
日本オープン・バイブル教団	40,000	2021
日本ベテルミッション	20,000	2021
日本ペンテコステ教団	0	2021済
サンビ教団	20,000	2021
フルゴスペル(純福音)日本總會	0	

<PWC参加積立>

2020年度	50,000円
2021年度	50,000円

会計残	1,479,290
積立金	100,000
合計	1,579,290

■ 日本ペンテコステ協議会 加盟団体一覧 (50音順)

イエス・キリスト福音の群

代表 永井 信義

〒 981-3604 宮城県黒川郡大衡村ゴスペルタウン 東北中央教会
TEL 022-345-2991 kakudai@ruby.ocn.ne.jp

神の家族キリスト教会

代表 水野 明廣

〒 464-0094 愛知県名古屋市中種区赤坂町 4-64 クリスチャンライフ
TEL 052-721-7831 info@christian-life.jp

サンビ教団

代表 辻 秀彦

〒 730-0812 広島県広島市中区加古町 14-8 ジーザスフェローシップ広島
TEL 082-241-8957 jfhkakomachi@yahoo.co.jp

シオン宣教団

代表 安達 隆夫

〒 578-0941 大阪府東大阪市岩田町 5-15-28
TEL 072-964-5144 osakazionchurch@yahoo.co.jp

単立ペンテコステ教会フェローシップ

委員長 芳 三容子

〒 238-0031 神奈川県横須賀市衣笠栄町 4-4-75 横須賀クリスチャンセンター
TEL 046-851-0327 miyokofusa@yahoo.co.jp (torunakami6@gmail.com 中見 透)

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団

理事長 土屋 潔

〒 170-0003 東京都豊島区駒込 3-15-20
TEL 03-3918-5935 japanaog@ag-j.or.jp

日本オープンバイブル教団

代表 菅原 亘

〒 653-0845 兵庫県神戸市長田区戸崎通 3-9-12 神戸キリスト栄光教会
TEL 078-612-5511 (trinitysquare.mbc@gmail.com 吉永 豊)

日本チャーチオブゴッド教団

監督 八束 選也

〒 146-0093 東京都大田区矢口 2-1-18 東京ライトハウスチャーチ
TEL 03-3758-1625 eriya@cog.jp

日本ネクスト・タウンズ・ミッション

代表 高橋 務

〒 486-0841 愛知県春日井市南下原町 3-5-8 主イエス恵愛教会
TEL 0568-85-9632 keiaichurch@lion.ocn.ne.jp

日本フォースクエア福音教団

総理 増井 義明

〒 359-1125 埼玉県所沢市南住吉 10-8 教団本部
TEL 042-933-1858 (anotopirou@yahoo.co.jp 阿野 俊郎)

日本ベテルミッション

代表 津坂 良夫

〒 197-0003 東京都福生市熊川 1101 福生ベテル教会 内
TEL 042-551-1327 fussabethel@gmail.com

日本ペンテコステ教団

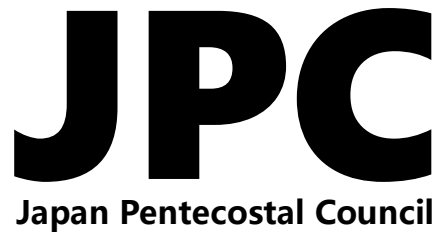
代表 榮 義之

〒 630-0243 奈良県生駒市俵口町 951 生駒聖書学院
TEL 0743-74-7622 ibcoffice@gmail.com

フルゴスペル (純福音) 日本総会

総会長 志垣 重政

〒 160-0021 東京都新宿区歌舞伎町 2 丁目 2-19 純福音東京教会
TEL 03-3232-0667 (m.senoo1001@gmail.com 妹尾 光樹)



日本ペンテコステ協議会

《事務局》 日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団 本部内
〒170-0003 東京都豊島区駒込 3-15-20 TEL. 03-3918-5935 FAX. 03-3918-0474